

ワールドカップ カタール大会雑感

渡島医師会
おおえ内科消化器科

おおえ やすお
大江 安男

11月末に原稿の依頼をいただき、内容を考えあぐねていたところ、2022 ワールドカップ カタール大会が開幕しました。おそらく人類の進化に最も貢献したであろう両手をあえて使わないスポーツという、ある意味マゾヒスティックな競技になぜこれほど人々は興奮するのか。実のところ未だに理解できないのだが、世界中の老若男女を虜にするのを見るにつけ、戦争回避のためのガス抜きか、日頃の鬱憤のはけ口なのか、FIFAのスポーツビジネスの賜物なのかと邪推してしまふ。ドーハの悲劇とやらを、テレビで繰り返し見させられた世代なので、サッカーにそれほど思い入れのない自分でも、今回はリベンジなのかと注目せざるを得ないわけです。喧しいにわかサッカーファンだらけのテレビの映像でも、無条件に日本の勝利に熱狂し歓喜する人々を見ると素直に幸福な気持ちになります。

一方、敵対国を応援したからと自国民を射殺するおぞましい国があるかと思えば、初めての勝利を祝い祝日にする国があったり、かたやウクライナでは主権国家の民間施設やインフラに一方的に攻撃を繰り返すというロシアの暴挙により、北海道並みの気候の真冬に暖房の無い状態で、爆弾に怯える日々を過ごさなければならないという、不条理極まりない有様で、一体、人類は進歩しているのか、退化しているのか、いや全く変わっていないのかもしれない。

毎日の診療が終わると、小一時間の老犬の散歩に出かけるたびに夜空を見上げます。地球の歴史上、小惑星の衝突でこれまで五回の絶滅を経験しているそうです。満天の星々のたった一つにさえたどり着けない人類なのに、この地上での出来事をみる限り、たとえ壊滅的な絶滅を切り抜けても、結局同じ歴史を繰り返すだけではないのかと。散歩の後、満腹になって足元でいびきをかいている相棒との夜中のサッカー観戦も残すところあと一戦。結果は皆さんご承知の通り。しばしこのろくでもない素晴らしき世界を皆さんと共に。

ほぼ毎日、深夜の読書

美唄市医師会
北海道せき損センター

たかまつ つねお
高松 恒夫

寝つきは良いのだが、3時間位すると目が醒める。枕元の本に手を伸ばし、読んでは眠ってを朝まで何回か繰り返す。細切れ睡眠である。

読むのは、もっぱらミステリー。これは、

①本格推理小説②倒叙推理小説③ハードボイルド④スパイ・スリラー⑤サスペンス小説⑥法廷小説⑦警察小説⑧冒険小説に分類されている。

SFや歴史小説を加えてもよいかもしれない。そうすると、いわゆる純文学以外はほとんどミステリーになってしまう。

話は変わって、私が天才と思う作家の一人に山田風太郎氏がいる。彼の戦中・戦後の日記を読むと、東京医大の在学生の時から多くの小説（おもに推理小説）を発表し、その原稿料で酒・本を購入し多飲・多読だったようだ。卒業後、インターンの時に「自分は精神的にも肉体的にも、そして性格的にも医者に向いていない」と、医者道を放棄した。医学士であるが医者でない著名な作家を彼以外私は知らない。彼の主な作品には年代順に推理小説・忍法もの・明治もの・室町ものがあるが、それ以外にも多くの作品があり、全てが面白い。

未読の方には、まずは一読をお勧めする。彼の晩年のインタビューでは、「夕食の時にお酒を飲み、その後一眠りし深夜に起きてまた飲む」との一日二度酒であり、「アル中ハイマー」を自称していた。記憶力の若干の低下はあったかと思うが、頭脳は明晰だったようだ。

彼には奇書「人間臨終図巻」（全3巻）もある。これは、古今東西の900人余の亡くなった年齢と死に様を一人一人記録したものである。少なからずの死が悲惨である。

折りに触れて本書を手にするが、その都度私自身の死はいつ頃どのような形で訪れるのかとの思いに駆られる。